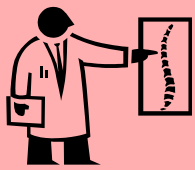


伊藤外科ニュース



90号

2011.12 発行



冬の到来

熊野神社の銀杏の巨木の葉がやっと黄色く色づき始め、朝夕の空気はキーンと冷たくなってきました。昨日私もコートを着て外出しました。いよいよ冬の到来ですね。

冬の季節の花といえば、今やシクラメンやポインセチアといった赤い花が多くなりクリスマスの時期を迎えます。我が家は子供たちが大きくなりクリスマスの楽しみも少なくなりましたがクリスマスツリーは家内が飾りつけをしています。新宿の高層ホテル周辺のイルミネーションも綺麗になりこの時期の風情を楽しんでいます。



腹痛の話

今回は腹痛について少しお話します。私の大学病院時代の専門領域は消化器の病気でしたので、伊藤外科には、突然の激しい腹痛や痛みの慢性的な繰り返しを訴えて来院される患者さんが多くいらっしゃいます。

初診で病名が確定する事は比較的少なく、まず医師は病状から重症度と緊急性を考えます。

発熱や痛みで体を前かがみにして歩く姿勢で診察室に入って来る患者さんは腹膜炎の可能性があり治療に緊急性があります。また出血を伴う下痢も感染性腸炎や虚血性腸炎など入院を要する場合があります。

緊急性はなくともお腹の張りは腹水の有無を調べる必要があり、腹水の原因として重要な病気は肝硬変と消化器のガンであります。緊急性の高い患者さんは受診された日に入院を要するため近隣の大きな病院に入院します。

またガンや肝硬変など緊急性は低いが見逃してはいけない病気を疑った場合には当院で可能な範囲の検査治療を行いその後もっとも適切な専門病院で医療を受けていただきます。胃や十二指腸の潰瘍は内視鏡検査で確定し、飲み薬も効果が素晴らしいので外来での治療で十分な場合がほとんどであります。

消化器のガンは、皆さんにとっては怖い病気でしょうが、緊急に治療を要する場合は少ない病気です。じっくりと病気と勝負して行くことが可能です。

一方、発熱、血便、嘔吐を伴う腹痛の場合は、原因が各種の消化管感染症、胆石による胆嚢炎や腸閉塞などであり、良性の病気でありながら直ちに治療を行わないと経過が不良の事があります。上記のような症状の場合には早めに医療機関を受診する事が必要です。

11月末の時点で西新宿地域ではまだインフルエンザの流行の報告はありません。しかし、発熱や下痢嘔吐などの感染性胃腸炎の患者さんや、扁桃腺炎の悪化した方が徐々に増えています。お気をつけてお過ごしください。



院長



今回の一冊

遠い幻影

著者 吉村 昭

久しぶりに短編小説集を満喫した。9月号に引き続き、吉村昭氏の著書である。知らなかったなあ。吉村昭といえば、「歴史小説の人」と思っていたが、現代小説の短編をかなり書いていたんですね。

「短編小説は、その作家の力量を表す」というのは、よく聞く話。本書のあとがきにも吉村氏はこう書いている。「私が短編小説を書くのは、竹にとっての節に似た意味を持つ。竹の節のように、一定の時間の間隔をあけて短編を書く。苦しい仕事ではあるが、それを書かなければ、小説を書く私が、もろくも途中から折れてしまうような危惧をいただいている」と。

本書に納められている12編の短編は、どの話も登場人物は市井の人々。ひどく大きな事件はおきない。淡々と続いていた日常に起こった「人生の時の流れのなかの一瞬の揺らぎ」を描いている。

なんといっても、どの小説も状況描写がいい。冒頭から情景が目浮かび、その物語の世界に読み手をストンと連れて行ってしまふ。例えば――、

ホームのベルが鳴り終わると、ジーゼルカーがエンジンの回転音をたかめて動き出した。

ホームが後方に消えると、屋根に分厚く雪をのせた家々が沿線につづく。久美子は、窓枠に肘をのせて町に眼をむけている。
〔父親の旅〕より

この短編は、定年を過ぎた菊岡という男のある冬の物語である。菊岡は妻とふたり、定年後の静かな暮らしをしていた。ひとり娘の久美子は見合い結婚ですでに嫁いでいる。子どもも授かり幸せに暮らしていると思っていた娘が、ある日突然、男と出奔してしまう。一年以上、行方知れずだった娘の所在がひょんなことからわかり、遠く離れた北海道の雪深い町に菊岡が娘を連れ戻しに行くところから物語が始まる。

物語は大きく揺れ動くことはないが、それぞれの気持ちの揺らぎが繊細に描かれる。もっとも心に残るのが終盤。「妻が戻ってきたら、すべて白紙に戻して受け入れるつもりです」と言っていた久美子の夫。だが、菊岡の妻が、久美子が連れて帰ってこられたことを電話で知らせると、ポツリと「離婚の手続きを進めたい」と言ったという。当然といえば、当然の話である。物語は、妻からこの話を聞かされた菊岡が、風呂場から聞こえる娘と妻のたわいもない話し声を聞きながら、ウィスキーのコップを手にするところで終わる。

この短編集に納められた小説は、どれも、ある意味「起承転結」の「結」という終わり方をしない。「結」を描くことのほうが、小説としてはたやすいのかもしれない。あえてかどわかにはわからないが、吉村氏はそこを描かない。しかし、だからこそ、これらの短編にはなにやら人生のリアリティーを感じてしまうのである。

(一弓)